

日本武尊の足跡を追いかける

日本武尊の物語は伝説か実話か

大和朝廷は国を治めていく過程で各地で抵抗する賊「まつろわぬ者たち」を制圧する必要があるが、そこで、天皇の皇子として生まれた小碓尊(後の日本武尊)が將軍として多くの従者らとともに日本各地の賊征伐に派遣されたのです。これから『日本書紀』や『古事記』をもとにして、日本武尊による西征・東征の舞台となったところに出かけ、その足跡を確かめます。

伐を伝えているところ、南は鹿児島県から、北は岩手県に到るまで、全国各地に実際に外かけて調べてきました。



ヤマトタケルノミコト(「日本武尊」)『日本書紀』『倭健命』『古事記』と表記は大和朝廷が全国を統一していく過程で活躍したヤマト(倭国)の複数のタケル(勇者)あるいは將軍を意味するたちの物語とする説が有力です。学校でもそう教えています。

しかし、日本各地の伝承を調べてみると、「ヤマトタケルノミコト」が複数の人物を一人にまとめた名とは考えにくいことがわかりました。やはり「ヤマトタケルノミコト」は「日本武尊」という一人の人物として見るべきではないかと思えるのです。また、日本武尊が単に神話、伝説や架空の物語上の人物ではなく、本当に存在したのではないかと思わせるだけの足跡も全国にあるのです。そこで、日本武尊による悪党征



赤点は日本各地にある日本武尊の伝承地

日本武尊伝説 <https://www.yamatotakeru.jp>

日本武尊軍団の活躍



羽曳野白鳥陵

日本全国の神社や史跡に伝わる伝承は古墳時代に大和政権がどのように全国をまとめたかといった後世に伝えるための実話がもとになっている。中には後世の創作話もあるでしょう。作り話でも長く伝えられてきたことで実際に起こったことのように思い込まれてしまった可能性もあるから。記紀の日本武尊の話は、四道將軍をモデルとした複数の人物による大和政権の全国統一の物語とすることがあります。その場合、複数の將を合わせて彼らを「日本武尊」と称する一人の人物を創り上げたことになり、日本武尊は架空の人物となります。これに反し、私は天皇の命により天皇の皇子として生まれた日本武尊という一人の実在の人物がその仲間の將たちとともに全国各地の反乱賊を治めたのだと考えています。しかし『日本書紀』から、西征が景行二十七年十二月、二十八年二月、約十年のブランクの後、次の東征は景行四十年十月、四十二年の短期間に行われたことを考えると、日本武尊が祀られ伝承として伝えられている全ての地域に出かけたのだとは考えにくいのです。それは当時の移動手段が徒歩か船しかなかった(歴史的には荷役以外の馬の利用はもと後時代の時代に行われたとして考えられています)ことを考えれば相当な無理があります。私は多少の無理を承知に「日本武尊軍団の活躍」として考えています。本隊には天皇の皇子の日本武尊がいて、各部隊には天皇や大和朝廷あるいは日本武尊の名を掲げた將たちが本隊とは離れ各地に散らばっていたのです。その時、その部隊は「神である天皇の命により遣わされた神の子日本武尊の軍」とでも名乗っているかもしれません。神の子の軍と知った村人たちは、実際に日本武尊が来ているなくてもその威光をたたえ、後に日本武尊を祀る祠を建てたのではないのでしょうか。

日本武尊の伝説

日本武尊の父は第十二代景行(けいこう)天皇です。母は播磨稲日大郎姫はりまのいなびのおいらつめ(で稚武彦(わかたけひこ)命の娘です。景行天皇の第二皇子は大碓(おおつす)皇子で小碓(おつす)尊とは双子です。異母兄弟は八十人いたと言われています。景行天皇はかつて自ら九州に遠征し熊襲(くまそ)を征伐しました。天皇の西征から十二年後のことです。熊襲がまた騒ぎはじめました。そのため、熊襲を討つのが急務となりました。天皇は十六歳の小碓尊に熊襲を討つよう命じました。



熊襲の穴 霧島市

熊襲の首領は熊襲健(たける)と呼ばれていました。大和朝廷に反抗していたのは熊襲以外に「土蜘蛛(つちぐも)」と呼ばれていた者たちがいいます。凶暴な者たちで山の窟(くつ)に住んでいました。九州北部で土蜘蛛たちが激しく抵抗しましたが征伐されました。

熊襲建は新築祝いの宴会を楽しんでいました。その宴会に小碓尊は女装して紛れ込むことに成功しました。宴もたけなわ、熊襲建は女たちの中にひとさわ目立つ童女の姿を見つけ、手を取って隣に座らせました。そして、お酒を飲みながら戯れていました。この時とばかりに小碓尊は衣服の裏に隠し持っていた剣を抜き、熊襲建の胸を刺しました。床に倒れこんだ熊襲建はこの勇敢な童女が日本童男(やまとおこな)とわかったと、これよりあなたは日本武尊と名乗ってください。」と願いました。これを受け入れると、日本武尊は熊襲建の胸を突きさして殺しました。



伊吹山 岐阜県・長野県

その後、瀬戸内海の怪魚退治にも日本武尊が派遣されました。従者たちは怪魚の毒気に当てられ苦しみました。八十場の霊泉水を飲ませたところ正気に戻りました。日本武尊によって怪魚は退



焼津神社 静岡市

景行天皇は臣下を派遣して国を視察させました。そんな折、東国から蝦夷(えみし)が反乱を起こしているとの情報が入りました。そこで、再び日本武尊が東国平定のため派遣されることとなりました。宮を出発した日本武尊は伊勢を経由して尾張に向かいました。

愛知県の東海道に沿った地域には日本武尊の滞在地、通過地、戦地とする伝承があります。矢や矢じり作りなど東征に備えたと言われる伝承もあります。三河の山間部にも足跡があり、陸路で駿河に向かったと思われる。

日本武尊が駿河に到着すると土地の首長が尊を狩りに誘いました。尊が野に入つてすぐのことです。妃の弟橘媛とともに炎に囲まれてしまいました。尊らはだまされてしまったのです。すると、帯刀していた天叢雲(あめのむらくも)剣が抜け出し草を薙ぎ払いました。尊は持っていた火打石で迎え火をつけて難を逃れました。尊を救った剣は草薙(くさなぎ)剣とよばれ、三種の神器の一つとなりました。

日本武尊は相模に到り、海を挟んだ対岸の上総に渡るうとして「こんな小さな海一つ飛びだ」と言いながら出航しました。すると暴風が吹き荒れ船は先に進まず、今にも沈みそうになりました。海神が怒ってしまったのです。怒りを鎮めるために弟橘媛は侍女らとともに海に身を投じます。すると海が静かになり、尊は難を逃れて上総に上陸できました。目の前の海は美しく輝き、二度と会えぬ弟橘媛のことを思い出して尊の悲しみは増すばかりでした。しかし、ここには



走水神社 横浜市

蝦夷(えみし)最強の敵が待つていました。房総半島の悪留王(あくるおう)も、この戦いは予想以上の苦戦となりました。諸神のご加護もあり、日本武尊軍は賊を全滅させました。東京都内にも日本武尊が東征の際に立ち寄ったとする伝承が多くあります。弟橘媛を偲んで建てられた神社や立ち寄り地に祀られた神社もあります。日本武尊は北進し蝦夷との戦いを続けました。大きな鏡を掛けた船で上総から海路で葦浦(あしうら)を回り玉浦の横を通って蝦夷の境に到りました。そ



玉清井 山梨市

して、海路を北上し、竹水門(たかのみな)とから上陸しました。

『常陸国風土記』に地名についての由来が書かれています。蝦夷から常陸を通ったとき、清く澄んだ水が湧き出す泉で手を洗ったとか衣の袖が垂れて水にひたつたから地名が常陸となった伝えています。

陸奥を平定した日本武尊は新治・筑波を過ぎてから千葉県の西北部を通過し、再び東京都内の神社の伝承として語られています。その後日本武尊は甲斐国に入り酒折宮に滞在しました。灯をともして食事をして「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と歌で尋ねました。従者たちは答えられませんが、灯り番が尊の歌に応えました。



走水神社 横浜市

上野国を抜けて信濃国との境に至った日本武尊は碓日坂で東国を偲びました。走水で亡くなった弟橘媛を思い「吾婦はや(あづまわや)」と嘆きました。これがもとで関東を吾婦(あづま)東国と呼ぶようになったと言われています。さらにいくつもの山を越えて進みます。

日本武尊は美濃から尾張国に入りました。岐阜愛知県境の内津峠で建稲種命が亡くなったことを知ると悲しみがこみ上げてきました。鳴海(なるみ)から宮寶媛の館に至り、久しぶりの平穏な時を媛とともに過ごしました。



能美野神社 岐阜市

しばらくして、伊吹山を拠点としていた一族が大和朝廷に反抗していると知らせが届き、その征伐に出かけねばなりません。伊吹山の賊なら難なく退治だろうと思つたのか、日本武尊は神剣を館に留め置いたまま出かけました。

伊吹山の神は雹を降らせて日本武尊を攻撃しました。峰は霧がかかり谷は暗くなりさまよつてしまいました。居醒(いさめ)の泉で休息しましたが病となった体は回復せず、能褒野(のぼの)で亡くなってしまいました。日本武尊の体は白鳥となり大空に飛び立っていきました。